

平成30年産米 作付動向第2報

～主食用米は新潟・千葉で増産に転ずる

農水省は5月30日に平成30年産米等の作付動向について発表を行った。当紙519号（3月28日発行）でも掲載したが、第1回目報告の本年1月末から3ヶ月経た経過報告となっている。農業・米穀専門紙だけでなく全国紙にも内容が掲載されるなど、減反廃止元年となった本年がどのような作付傾向となるのか注目されている。農水省発表の主食用米の作付意向調査によると「4月末現在 34道府県前年並み 増加傾向は6県」と報告されている。専門誌でも見出しは同様である。第1報の1月末段階では増産意向があるのは6県であったが、今回の報告では青森・岩手・秋田・福島・鳥取は変わらず増産の意向があるとしているが、山口は一転して増産から減少意向となった。前年作並みから減少の意向があると報告した県は宮崎県、減少傾向から前年並みに回復すると報告した県は千葉県、前年並みから増産意向があると報告した県は新潟県となりここ3ヶ月の間で第1回目の調査とは異なる動きが見られた。前回でも報告したが、主食用米が増える傾向である県の特徴として飼料用米の作付が減少すると答えた県が多かったが、その傾向は拡大している。飼料用米の作付が減少するとした県として、更に11県（岩手・福島・栃木・新潟・長野・岐阜・兵庫・徳島・愛媛・宮崎・鹿児島）が加わった。飼料用米が前年並みから増産すると回答した県はたった2県（滋賀・岡山）のみ。ここまで飼料用米の作付面積が右肩上がりであったのが落ち着いていく兆しとなるのだろうか。さらに今回の報告で変わった点として加工用米の作付意向が前年度よりも減少すると答えた道県が9道県（北海道・岩手・宮城・茨城・長野・愛知・鳥取・山口・徳島）あることだ。逆に前年並みから増産傾向にあると答えた県は6県（山形・栃木・静岡・滋賀・広島・香川）となっている。加工用米は複数年契約のため現在、主食用米価格が上昇している中で増産傾向と答えた県は利用業者との取り決めが相互にうまくなされている動きであるものだと期待したいところだ。

同じく水田利用の戦略作物にあるのが麦と大豆となっているが、第1回目の報告と違う動きにあるのが麦となっている。増産から前年並み、もしくは前年並みから減少と減少傾向にあると答えた県は16県（青森・岩手・山形・福島・栃木・群馬・埼玉・千葉・富山・石川・岐阜・兵庫・島根・高知・大分・鹿児島）となった。逆に前年並みから増産傾向にあると答えた道県は2つ（北海道・和歌山）のみ。以上を総括すると、飼料用米、加工用米、麦が第一回報告よりも減少気味、主食用米、新市場開拓米が第一回報告よりも増産気味となっている。やはり、主食用米の米価が上昇しているため生産者は敏感に反応している様子が伺え、特に各自治体での生産目標を超過し続けてきた新潟や千葉が市場原理に即した生産者の素直な減反廃止元年の動きとなっていると言えるのかも知れない。

今回、増産の意向を示した6県は米の生産高比率が高い県となっている。その主産県が主食用米で増産の意向を示したことで流通業界では多少なりとも需給バランスは緩むのではないかと期待感も出て来るだろう。また、各県の作付銘柄も詳細に動向を掴む必要がある。特に不足感が出ている業務用途米の生産動向が注目されるだろう。今後の動きとして、7月末の流通在庫の発表と8月以降に本年度の水稻作付面積が確定発表、さらには作況指数が発表となり米価の動きが生産者・流通業者・消費者共に気になるところだ。早期から一般作の田植えは既にほぼ終了しているが、天災で一部作付が出来なかった地域を除けば概ね生育も順調に進んでいるようだ。今後も全国の作付動向や生育状況を追っていきたい。

【現場便り】小麦の生育と元肥一発肥料について

初夏を思わせる晴れた4月中旬と下旬に群馬県にて小麦に対する元肥一発肥料の生育調査にメーカー、販売店と同行させて頂いた。今年の関東地方における小麦の播種期は、前作の水稲が日照不足と低温により刈り取りが遅れその影響で麦の播種自体もズレてしまった。適期に播種が出来ない年は生育期の気温が高くない限り、茎数不足や収穫期に梅雨に見舞われ減収、等級も落としてしまう。今年は一般的に播種が遅れただけではなく降雪や低温、冬期の乾燥により生育が緩慢となり、追肥も吸収しにくい状況で厳しい環境であったといえよう。出穂期を想定して調査に同行したのだが、一般的に適期に播種が出来たものはまずまずの生育であったのだが、播種が遅れたものに従って顕著に生育が悪い印象を受けた。例年と比べて草丈が短く、葉色も薄いものが多い状況であった。小麦は収穫期に本格的な梅雨に当たってしまうと穂発芽しやすく収量減や品質低下に直結してしまうギャンブル性の高い作物でもある。生産者の印象でも「今年の麦は低温と乾燥が響いたので心配だ」との意見を持つ声が多く聞かれた。群馬県農政部技術支援課の報告でも播種が遅れた麦は茎数が少なく作柄は並み～やや不良との判定をしている。

さて、最近では生産者のニーズに応えた麦の元肥一発肥料が徐々にではあるが注目されてきている。元肥一発肥料は水稲用として一番多く利用されているが、高齢化や大規模化に伴い暑いさなかに穂肥等の中間追肥をする作業が大変なこと、本州では麦跡作の水稲であれば台風などの悪天候と追肥時期が重なり追肥を行うタイミングを逸してしまい品質低下や減収に陥ってしまうことから、近年では元肥一発肥料のニーズが年々増加してきている（その分、水稲においては追肥向けの肥料が減少）。水稲だけでなく、ここ5年位で野菜や麦の元肥一発



肥料について話題が出るようになってきた。麦の追肥場面は足元がそれほどぬかるんだ状況での追肥する作業ではない事、麦踏みや除草作業等で畑に幾度なく入る事、収穫物の反収が低く汎用化成や単肥しか利用しない生産者が多い、といった事から、麦での元肥一発肥料の普及は難しいだろうと肥料メーカーや肥料商は思い込んでいた感覚がある。然しながら、麦を作付する生産者にはその他の手間が掛かりやすい施設作物も栽培している方もいること、請負作業等で生産者の生産面積が増えることで作業の省力を狙うといったことから、元肥一発肥料のニーズも時代の流れで確実に出てきているようだ。また、麦はタンパク質含有量等、品質における買入価格もかわってくることから肥培管理が求められる作物でもある。麦は水稲、牧草、ソルゴーの次に栽培面積が多きく肥料メーカーにとっては見過ごす事が出来ない作物のひとつであり、よってメーカーはニーズに呼応するべく特長ある専用の肥料を上市してきている。本紙が出る頃は早生の麦の品種が収穫期に入る。今年は入梅が早くないことを祈りたい。（東京支店）

梅雨入りは南の方から始まり、関東地方も今週末後半からお天気が崩れる見込みなのでいよいよ梅雨入りしそうです。四国・九州地方は例年よりも約一週間ほど早い梅雨入りでしたが、期間も雨量も平年並みとなり、作物にも恵みの雨となることを願います。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>